



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                       |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 褻翫すべくして遠観すべからず : 愛連の説                                                                 |
| Author(s)        | 武田, 雅哉                                                                                |
| Citation         | 連環画研究, 1, 2-3                                                                         |
| Issue Date       | 2012-03-10                                                                            |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/2115.98374">https://doi.org/10.14943/2115.98374</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/98374">https://hdl.handle.net/2115/98374</a>     |
| Type             | departmental bulletin paper                                                           |
| File Information | renkanga_1_2-3.pdf                                                                    |



せつがん  
褻翫すべくして遠観すべからず——愛連の説

武田 雅哉

れんかんが  
連環画とは、小人書とも呼ばれ、民国期に生まれた、小さな劇画本である。一般に、横にしたハガキよりひとまわり小さいくらいの大きさで、1ページにつき絵が1枚描かれ、絵の下、あるいは左右いずれかに、文字説明が入る。フキダシを使う場合もある。

1949年の中華人民共和国成立後、新政府は新しい時代に即した内容の連環画が、政治宣伝や人民教化に有益であると考え、新しい内容の連環画の製作を奨励するとともに、武俠もの、エログロものといった旧来の作品にたいしては、これらを悪書とし、弾圧をも加えていった。そのような経緯から、中華人民共和国の連環画は、そのすべてが政治的産物であるといえる。たとえそれが、古典小説や外国の童話を連環画に仕立てたものであっても、そこには当時の共産党政権からのメッセージや、これに敏感に反応しながら蠢いていた社会の風潮が読み取れる。われわれもまた、それを解説しなければ、ひとつの連環画作品を理解したことにはならない。つまりは手放しで楽しむことを許さない、やっかいなシロモノなのである。

では、連環画に描かれた物語は、お説教だらけの、読んでつまらない、政治的パンフレットにすぎないのであろうか？ そのようなものも、テーマや時期によっては、もちろんあるだろう。だが、少なくとも、中国人じしんによる多くの証言が、これを否定している。かれらはかつて連環画を読んで興奮し、十分に楽しんできたのであるという。つまりエンターテイメントとして、連環画は存分に機能してきたのだと。

1980年代ころまでは、連環画を読ませる露天の貸本屋がまだたくさんあり、子供たちが道端に腰をおろして日がな一日、読みふけっている光景がどこでも見られたものだが、いまではあまり目にすることができな

くなっている。また、冒頭で説明したような、伝統的な形態の連環画も、ほとんど作られなくなっているし、過去の作品は骨董品の扱いをされ、美本は高値で取り引きされている。連環画ファンを「連迷<sup>リエンミー</sup>」といい、連環画コレクションを「連蔵<sup>リエンツァン</sup>」という。「連」とは連環画の略称である。

私の所蔵する連環画は、中国のコレクターには、おそらく見向きもされないようなものであろう。露天の貸本屋に置かれていたものがほとんどで、風雨と陽光にさらされ、さまざまなハンコがべたべた押されて、表紙や奥付を欠いているものもある。これらに読み耽ったガキどもの手垢で汚れ、汗が染み込んでいて、しっとりとした湿り気さえ残している。なかに描かれた英雄人物の顔には、ヒゲやメガネが新たに描きこまれ、裏表紙は、飲み会で割り勘にするための筆算に使われたとおぼしい痕跡が残っているものもある。だがそのような「使用感」は、かれらが生きていたときのことを、雄弁にささやいてくれそうだ。

ここ何年か、学生たちと、それら反古に近い連環画を、手ずから読むという授業をしてきた。それぞれが関心を抱いたものを選び、気の済むまで藝翫<sup>せつがん</sup>し、考察を加えて報告するのである。私もまた、みずから担当した作品について、何度か報告をおこなった。

この冊子は、各自の授業での発表をもとに文章にしたもののほか、数篇の書き下ろしをも交えたものである。見た目はチビでも、連環画の背後に広がる世界は、あまりに大きい。だが、これらを俎上にあげて、あまり切れ味の良くないわれわれの包丁でさばいていくことは、味はともかく、このうえなく楽しいことなのである。

本冊子は『連環画研究』第1号と銘打ってはいるが、第2号が世に出るかどうかは保証しない。いずれにしても、日本で最初の連環画研究文集であるとの荣誉と謗り<sup>そし</sup>とを、私たちは、よろこんで受けることであろう。